

なんとかならないかなあという意見を

(ニーズとシーズの誌上討論の提案)

檜 尾 守 昭*

1. 提案のいきさつ

「天気」をさらに魅力的にするためには、という話題が「天気」編集委員会で上がった。他の方の意見を伺って、気象内外の色々な立場の方から気象分野に対するニーズ(needs; 新たな発展のための需要)を「天気」誌上に出して頂き、それに応えて、現段階のシーズ(seeds; 原動力となり得る成果)を踏まえて対策を提案して頂くというような誌上討論ができれば、「天気」のみならず気象学の発展のためにも有用なのではないかと思った。編集委員長からも勧められたので、この欄を借りて以下のことを皆さんに提案してみた。

2. 本 論

互いに関連するテーマを持つ研究者の間では、「こういうことについてはっきりしたことが言えれば助かるんだけど、何とかならないかなあ。」「ここまで分かっているから、それを応用してこうすればいいんじゃないか。」といった、ニーズとシーズの話合いは日常的に行われている。

ところが、同じ気象学の中であっても、直接の関連性が薄い分野の間ではニーズとシーズの話合いはしにくい。それは、研究はそれまでの研究成果の積算としての学問体系に基づいて行うべきものであり、幾つかの段階を踏んだ後でなければ応えられそうにないニーズに対しては、直接的な対応のしようがないからである。同様に、一般社会からのニーズに対しても、それに応えるためという動機があっても、はた目には実用性からかけ離れたテーマを選ばざるを得ないこともままある。

大気大循環論や二酸化炭素・オゾンの観測などの分野は、以前は一般社会の目には、無縁の学問と映っていたものと思う。ところが近年、地球環境の保全・気候変動の予測という社会的ニーズが強くなり、これらの分野の研究活動はにわかに活況を呈してきた。ニーズがシーズ

を触発しているといえよう。一方、気象学ではないが物性物理学や情報科学などは、そのシーズがコンピュータや通信網に結実し、産業界のみならず日常社会をも変革するに至った。シーズに触発されて、潜在していたニーズを次から次へと掘り起こされている。

気象に対しては、明日の予報から台風・集中豪雨雪の予測、長期予報など、もともと社会的ニーズが強い。しかも、電子・情報関連産業の充実にもなって、気象と社会の距離は縮まりつつある。ニーズを意識することは、研究の方向を正しく保つためのよい指標になるものと筆者は信ずる。したがって社会の人からの気象に対するニーズをいろいろと表明してもらえる場があっても良いのではないかと考える。気象の側からも解決策あるい解決の方向を提案していけば、ニーズがシーズを触発し、シーズがニーズを触発するという良い循環がやがては得られるのではないかと期待する。

もちろん、気象内部でのニーズ・シーズの話合いも、活発にする余地があると思う。例えば、解析分野の人から測器分野の人に「これこれのデータがあれば助かるんだが、そのための測器開発はできないかなあ。」といったような問いかけが考えられる。理論分野や数値モデル分野から解析・観測分野に対して、「こういう現象のこのような振舞いをこの程度の分解能で確かめることできないだろうか。」とかいうのも考えられる。

そこで筆者は、「天気」誌上で多くの方から気象に関連するニーズを表明して頂き、それにシーズの側が応えて共同作業により解決の方向を求めるといった形の誌上討論ができたならと願うものである。学術雑誌は研究の成果すなわちシーズを発表する場であるが、「天気」誌上にニーズが活躍する場も与えられれば、気象学が発展する契機も倍増するのではないだろうか。

3. 呼びかけ

このような研究を気象分野の人にしてほしい、あるいは
(P713につづく)

* 天気研究所台風研究部

(I.H.)

4. 2 大気力学観測ネットワーク (DYANA)

昨年来、西独の Offermann は、気象ロケット (20~60 km 高度はゾンデ、80~120 km は落下球使用) その他の観測手段を世界的に動員して、中層大気の惑星波・重力波を同時観測する計画 (DYANA と略称) を提案している。西欧諸国を中心とした各国の研究者との意見交換を踏まえ、計画の実施を議論する非公式な会議が、MAP シンポジウム参加者有志を集めて開かれた。既に西独では気象ロケット調達のための予算が具体化し、特に日本には32機が配布される予定で、これを受けて宇宙研 (会議には小山孝一郎氏が参加) では鹿児島宇宙空間観測所 (内之浦町) での実施準備を開始している。今回

の会議では、観測期間を1990年1~3月の8週間とし、取得データは自由交換を旨とすることなどで合意した。観測の実際面や解析方法、最終的参加者の確認、各国間の組織などにはなお問題があり、今後適当な機会に再び会合が持たれる予定である。現在のところ、惑星波のグローバルな解析については Offermann 自身の他に廣田が、また重力波のローカルな解析とグローバルな比較については仏の Hauchecorne と山中が、それぞれ参加を要請されている。(M.D.Y.)

最後に、筆者 (山中) の参加は科研費 (代表: 松野東大教授) による国際共同研究の機会を利用して頂いたものであることを記し、関係各位に謝意を表する。

今年お世話になったレフェリーの方々 (昭和63年)

青木 孝、青柳二郎、赤枝健治、秋山孝子、足立 崇、猪川元興、内野 修、上田 博、奥田 稷、加藤内蔵進、加藤真規子、北村佳照、木村富士男、楠田 信、久保田効、近藤純正、近藤裕昭、佐橋 謙、沢井哲滋、宍戸信行、高谷美正、武田喬男、長沢親生、新田 勅、

二宮洸三、能登正之、花輪公雄、藤井 宏、藤部文昭、藤吉康志、松尾敬世、松田佳久、萬納寺信崇、水野量、三村泰一郎、村上正隆、森 征洋、山形俊男、山田芳則、安成哲三、吉崎正憲、吉住禎夫、余田成男
(敬称略)

(p714からつづく)

はこのような問題があるが、なんとか解決する手だてを提案してもらえないものだろうか、といったニーズを「天気」の「会員の広場」欄などにどんどん投稿して下さい。また、それに応じて、こうすれば解決できそうだから、こういう研究をすれば解決の糸口も見つかるだろうとかいう意見もだして頂きたいと思います。

気象に対してニーズをもっているのは、「天気」の読者に限りません。従って、気象関係者からはもちろん、農業・漁業・工業・運輸業・土木建設業・サービス業・情報産業など様々な業種の方、また一般社会の方からもニーズを天気誌上に出して頂けたらと思います。読者の皆さんから、身近の方にも声をかけてみて下さい。